

## CONTENTS

- 平成30年度のFD活動を振り返って
- 学生から高評価のスライド教材の工夫について  
—平成29年度2期ベスト・クラス賞受賞科目—
- 「倫理学とは何か A、B」  
—アクティブ・ラーニングの取組み—
- 大学教員の職能開発とFD  
—平成30年度FD推進ワークショップ—
- 2018年度外部評価委員会  
—学生の主体的参加を促す授業形態の導入について—
- 7 学士課程教育の質保証へ向けて  
—初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開—
- FD研修「著作権法改正が大学教育に与える影響」開催報告

## 感情と音声の関係

俳優に同じ言語内容を5種類の感情を込めて話してもらう

声の高さ



感情の種類	恐怖	怒り	悲しみ	軽蔑	無関心
周波数 (Hz)	254.4	228.8	135.9	124.3	108.3

参加者にどの感情か回答させる

▶ 正答率66~88%

Paul (1983). Body movement and interpersonal communication. John Wiley & Sons, UK: Chichester, Sussex.  
Fairbanks & Protovos (1939). An experimental study of the pitch characteristics of the voice during the expression of emotion.  
日本心理学会 (1979). コミュニケーションの心理学—認知心理学・社会心理学・認知工学からのアプローチ—  
Scherer (1974). Methoden der empirischen Sprachforschung. In: J. von Stechow and M. Witten-Moyser: Techniken der empirischen  
Sprachforschung II, ed. München: Olms Verlag.

Rissho University

FD News Letter

Vol.22  
March, 2019

## 平成30年度のFD活動を振り返って

FD担当副学長 池上 悟

平成30年度のFD活動は、昨年度に引き続き「学士課程教育の質保証へ向けて～初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開～」を年間テーマとして実施しました。いまや高等学校から大学への学びの接続を滞りなく果たすためには、様々な施策が必要であり、本学においても全学的、学部別を実施してきております。これら学部の取組みの様子等を本誌に掲載することで、優れた事例や共通課題の共有に努めました。

また本年度は、平成29年度授業改善アンケートの結果に基づき選出された「立正大学ベスト・クラス賞」受賞科目担当教員による授業見学を、全学FD活動として初めて実施しました。これまでの事例報告と異なる学生の反応と併せての実践研究の機会となりました。

さらに、1月に神奈川大学の中村壽宏氏を招き「著作権法改正が大学教育に与える影響」と題した講演会を行いました。平成31年1月の改正法の施行に合わせ大学教育への影響を理解するとともに、より広く、授業に

留まらず研究、その他の業務全般に亘るコンプライアンス意識の向上を図りました。研修会には教職員、非常勤講師合わせて83名の参加があり、その内容について実に96%が「有意義だった」と回答するとともに、継続的な実施を要望する声が多数寄せられました。

ほかにも、平成26年度に採択された「大学教育再生加速プログラム (AP) テーマI: アクティブラーニング」の全学展開を図るために、全学部・学科において予習用動画を活用した授業を導入することを決定し、担当教員に対し「予習用動画導入研修会」を実施しました。予習用動画を活用した授業のあり方とその教育効果を多様な事例から研究することで、その教育効果を検証します。

FD活動は、教育の質的向上はもとよりその学修成果を以って社会に有益な大学として本学が存続していくために必要不可欠なものです。今後も有効な内容を検討しての不断の努力を続けていきます。

# 学生から高評価のスライド教材の工夫について

## —平成29年度2期ベスト・クラス賞受賞科目—

### 〈概要〉

平成29年度授業改善アンケート結果より2期ベスト・クラス賞を受賞した「コミュニケーション心理学」「教育職の研究B」について、特にスライド教材の工夫が学生より高評価を得られたため、その工夫をお伺いいたしました。

### 「コミュニケーション心理学」

笠置 遊 先生 (心理学部 対人・社会心理学科 講師)

最近、授業中にスマホを見たり、内職をしたりする学生が増えてきました。「前を見て聞いてください」といくら注意しても、彼らはすぐにまた自分の世界へ戻ってしまいます。そこで、注意をしなくても学生が思わず見たくくなるようなスライド、聞きたくなるような内容にしよう、と考えながら授業展開を図っています。

私の講義では、主にスライドを活用するのに加えて、スライドの内容を印刷した資料を配付して授業を行っています。まずは、どのスライドも、文字の量を必要最低限に抑えてスライドがすっきり見やすくなるようにしました。また、文字の色、フォント、サイズを統一し、重要用語や穴埋め箇所のみサイズや色を変え、何が重要か一目で分かるようにしています。さらに、学生が内容をイメージしやすいように適宜イラストを入れ、可能であれば、研究で実際に使用された刺激画像を載せて、“実験参加者”を体験しながら理解できるようにしました。研究結果のグラフや表についても、口頭での説明とアニメーションとを連動させて、グラフのどのデータに着目するとどんなことが分かるのか視覚的に捉えられるように工夫しました。

今回の授業改善アンケートには、「配付資料が見やすく復習しやすい」といったコメントもあり、授業外学修のモチベーションにもつながっているのかな、とうれしく思いました。

今回評価していただいたスライド教材は、学生の授業中の反応、リフレクションペーパーや授業改善アン

ケートの自由記述欄に書かれたコメントも参考にして作られています。学生の生の声を積極的に取り入れることで、今後もよりよい授業を展開できるよう努力して参りたいと思います。

### 「教育職の研究B」

臧 侑 先生 (非常勤講師)

この度はベスト・クラス賞をいただきまして誠にありがとうございます。

「教育職の研究B」の授業は、教職の意義や教員の役割などを扱っていますが、どのようにして意欲的に授業に取り組んでもらえるかが大きな課題です。そこで、この授業ではスライド画面の作り方とそれに伴う学習方法およびノートの取り方の工夫を通じて学生に学習意欲を促すことを目指しています。

まず、スライド画面ですが、一面に書かれた文字を見た時の心理的拒絶反応を避けるため、文章を徹底的に簡略化し学生がノートを取りやすいように工夫しています。それに伴う学習方法の工夫とは、簡略化したスライドに対する説明を手厚くすると同時に、他の教材を使って補足学習を行うことです。スライドに対する説明は口頭だけでなく、時々スライド上に写真や図表、時には動画などを組み込んで視覚的に見やすいものを使っています。難解用語が出た場合は、敢えて避けないでそのままスライド画面に提示し、分かりやすい言葉に言い換えて説明します。教育の専門用語に慣れてもらうことも大切な学習です。また、教科書の関連部分を活用し、そこに下線を引かせることによって復習効果を図ります。さらに、関連する資料を配付して学習内容を再確認します。このように、一つのテーマに対して、複数の異なる手段により反復学習を行っています。注意すべき点は、スライドの提示と説明の間にノートをとる時間を与えること、説明を聞く時はノートにメモするよう促すこと、そして、忙しくこれらの作業をさせ活力をもって授業に取り組んでもらうことです。

次にノートの取り方の工夫ですが、ノートの中間に線を引き、スライドの記録と自らのメモを分けるようにします。スライドは短文とキーワードが主であるため、学生の殆どがメモを取っています。説明の際にも多くの学生がよく聞きながらメモをするようになっていきます。その結果、ノートは整然となり、復習する際に授業内容を思い出しやすく、説明した際のメモもあるため、授業の理解度の向上へとつながり学習の達成感を感じるようにもなります。

「教育職の研究B」を担当することにより、努力する多くの学生たちに出会えました。このことは私にとって最大の幸せです。学生たちの努力する姿はよい授業の源です。ここで学生の皆さんに感謝を申し上げます。



ベスト・クラス賞受賞科目授業見学会の風景



## 「倫理学とは何か A、B」 —アクティブ・ラーニングの取組み—

木村 史人 先生 (文学部 哲学科 講師)

### 〈概要〉

「倫理学とは何か A」「倫理学とは何か B」は各々異なったアクティブ・ラーニングの手法を取り入れている授業であり、WebClass、ピア・ラーニング等を積極的に導入していることから、その取組みについて内容、手法や成果等をお伺いいたしました。



近年アクティブ・ラーニング (AL) の導入が推奨されていますが、グループワークが苦手な学生も一定数いるなど、解決しなければならない問題も多いといえます。そこで、私が担当している「倫理学とは何か A、B」(以下、「クラス A」、「クラス B」と略記)

で行っている試みを紹介します。この授業は、倫理学の基本的な思想(功利主義、義務論、共同体主義など)を理解することを目標としており、受講者は両クラスともに50-100名程度です。教員の講義をただ聞いているだけでは、知識を覚えることはできても、その思想を応用する力は身につかないと考え、「クラス B」ではピア・ラーニングを、「クラス A」ではe-LearningシステムであるWebClassを用いた授業を展開しています。

どちらの授業でも、穴あきの配付プリント、パワーポイントを用いての一斉授業を行ったあと、応用問題をまずは自分で考え、回答を記入させるという活動を行います。その後、「クラス B」ではグループで対話するピア・ラーニングを行い、「グループ A」では授業内でスマートフォンを使用し、自分の意見をWebClassに書き込むという活動を行っています。ピア・ラーニング、WebClassに入る前には、それぞれの活動の時間を示しましたが、予想以上に時間がかかる場合などは適宜延長し、そのつど学生にアナウンスしました。また、初回の授業で、後の活動の支障となるために私語、スマートフォンの使用、居眠りに対しては放置せず注意する旨を明示し、実際に注意をしました。

「クラス A」では、授業内で回答ができない学生は、授業後でも学内のパソコンなどで回答することを許可しました。WebClassへの回答は、時に三種類ほど問題を用意し、学籍番号末尾によってどの問題に答えるかを分けるなどしました。

「クラス B」では、事前にテーマについての賛成反対などを聞いたうえで、各グループで意見の多様性をはかりながら、教員がグループ分けを指示し、三回程度の授業で新しいグループに変更しました。

WebClass、ピア・ラーニング終了後、その成果について教員がコメントすることで教室内で理解の共有をはかりました(「クラス B」では、議論の成果を黒板に書いてもらいました)。授業時間内に収まらないときには、次の回にコメントしました。

「授業改善アンケート」および、この授業で独自に行っているアンケートの結果から、どちらのクラスでも、【1】双方向的な活動を取り入れたこと、【2】自分で考える活動が入っていること、【3】他者の意見・解釈を知ることができること、を肯定的に捉える学生が多かったです。また、「クラス A」のWebClassは学生から好意的に捉えられていましたが、これ以上時間・回数を増やさなくてよいと感じられていたのに対して、「クラス B」のピア・ラーニングは、もっと時間・回数を増やしてほしいと感じられた活動だったこともわかりました。

WebClassを導入することのメリットは、大教室でのALに向いており、ピア・ラーニングに比べて心理的な抵抗感が少ない点です。しかしアンケートでは「授業内で多人数が参加できるのはいいけれど、そうするとサーバーに負荷がかかってしまうのが難点だなと思いました」など、Wi-Fiの通信速度、WebClassの遅さなどの設備面での不満が多く聞かれ、その点で課題を残すことになりました。設備の現状を踏まえたうえで、より受講者がストレスなく参加できるような、WebClassの利用方法を考える必要があります。また、WebClassは、授業外での宿題や予習・復習でこそ本領を発揮するといえますので、今後はその点での活用も考えていきたいです。

ピア・ラーニングを行う「クラス B」のほうが、議論を得意とする学生が多いこともあり、活気がある授業となりました。ピア・ラーニングでは、時に自分の意見が理解されなかったり反論されたりといった軋轢が生じるといえますが、「自分の意見を言う機会、他人の意見を聞く機会が多くあり、自分の考えをより深く考えることができた」、「ピア・ラーニングを経ることによって自分の意見が変わることがあった」などの意見からは、ピア・ラーニングにおける軋轢が新たな学びにつながったことがわかります。

しかし、「グループの人によっては、議論が進まないことが多々あった」などのグループメンバーに対する不満や議論に対する抵抗感を示す学生も少なくありません。ピア・ラーニングを行う際には、役割(司会や書記)を決めたり、無理に発言を強制することないように留意するなど、対話のルールを整理することで、ピア・ラーニングが苦手な学生を排除しない一層の気配りが必要であるといえます。

# 大学教員の職能開発とFD ―平成30年度FD推進ワークショップ―

日時：【A日程】平成30年8月7日（火）～8日（水）  
【B日程】平成30年8月9日（木）～10日（金）

場所：グランドホテル浜松（静岡県浜松市）

参加者：教員2名

テーマ：大学教員の職能開発とFD

当日プログラム：

1. 全体説明（オリエンテーション）
2. グループ討議
3. ワークシート作成と模擬授業

## 〈研修概要〉

全体説明後に、授業での工夫や改善点、学生とのコミュニケーションで心がけていること等の内容を共有しつつ、参加者同士で意見交換会を行いました。その後、グループ内で模擬授業を実施し、コメントを出し合いながら多様な授業方法を共有しました。

仏教学部宗学科 講師 本間 俊文

## 1) ワークショップ参加前に考えていたこと

以前から授業中に居眠りやノートを取らない学生が散見されることが気になっていた。学問分野上、どうしても漢文の文献を用いることが多いため、学生が眠くなることもある程度仕方ないかもしれないが、その中でもシラバスに記載した到達目標を達成し、知識の定着を図ることが求められている。そのため、上記のような学生を極力減らすために効果的な授業の進め方や配付資料の作成方法など、具体的なテクニックなどを学びたいと考えていた。

## 2) ワークショップの気づきやプログラムの感想

模擬授業では、教員役として授業を行うだけでなく、他の先生方の模擬授業を学生の立場で聴講するという活動も行った。これまで抱いていた授業に関する疑問点や改善策等についてまず意見交換した上で実際に模擬授業に取り組み、さらに学生役として模擬授業を聴講したことで、自分の課題や改善点をより明確に把握することができたと思う。そのような点で、今回のプログラムは教員のスキル向上のための建設的なプログラムであったと思う。

## 3) 問題意識の変化や今後取り組んでみたいこと

これまでは授業の進め方で重視する点が見えていたように見えていない状態であったが、15分という限られた時間で行った模擬授業の実施と聴講により、学生の学びを促進する指導法が自分なりに見えてきたと思う。具体的には板書の仕方、板書中の時間の使い方、配付資料の質と量、授業中の私語を減らす対応策などを

学ぶことができた。また、授業中の話し方についても、教員側が特に伝えたい要点をいかにうまく伝えるかが鍵となることを学んだ。さらには自分の模擬授業を聴講した他の先生方より自分の癖や改善点の指摘を受けることができ、一方的な授業にならないためにも学生側からの視線をより意識しながら授業を進めていくことも大切だと感じた。

そして、質の高い授業を行うためには、何よりも授業の準備をしっかりとするのが重要であることを改めて痛感した。また、毎回の授業での反省点をメモしておくなど、次回以降の授業に向けた改善点を意識していくことが、授業の質を高める近道であることを再確認した。今後は学生の主体的な学びを深めるため、授業内で学生個々が考える時間を設けることや、リアクションペーパーの活用も視野に入れていきたいと思う。

地球環境科学部環境システム学科 特任講師 三島 啓雄

初日のFDに関する講義を受講したのち2日目に15分の模擬授業を行った。自ら講義を行い、さらに他の受講者の講義を聞いたうえで、この15分という設定時間は、講義の構成する時間単位として適切であるという印象を持った。90分間の講義を15分から20分のユニットに分け、講義→ディスカッション→講義（または実習）という形で構成していく手法は、学生の集中力の維持に効果的と考えられた。これについては模擬授業後の受講者間の情報共有の場においても、同様の印象を持つ教員が多く見られた。また、模擬授業において、「ホワイトボードのみ利用可能」という縛りを設ける点については、大学の講義の実際とは乖離しているものの、伝えたいことの要点を最小の情報で表現するトレーニングとしては有効であると感じた。

ワークショップ後の学期の担当講義は、大講義室での講義科目があるため、講義を細かい時間単位で分割して構成し、学生の集中力を保つ手法は実際に試そうと考えている。また、「講義」という言葉にとらわれず、学生が能動的に講義に参加する機会を設けることを考えてみたい。





# 2018年度外部評価委員会 ―学生の主体的参加を促す授業形態の導入について―

自己点検・評価担当副学長 永田 高英

〈委員会日時〉

平成30年8月2日（木）

13:25～14:15 品川キャンパス施設見学

14:30～17:50 品川キャンパス11号館11階第5会議室A

〈実施概要〉

- ・挨拶、委員・参加者紹介
- ・AP採択事例および概要報告
- ・意見交換
- ・委員コメント



2018年度外部評価委員会は委員7人出席のもと実施し、大学、高校、産業界の各視点から、「学生の主体的参加を促す授業形態の導入」をテーマとして、本学の取り組みを見ていただきました。

## 主な意見交換の内容

外部評価委員からの主な指摘事項は次のとおりです。まず、長所については、仏教学部で「文献（古文・漢文）読解基礎能力テスト」を開発・実施（入学時、2年次進級時）して伸びしろを測定していることがアセスメント・ポリシーの観点から興味深い取り組みとして、経済学部でニュース検定を実施してモチベーションを向上させていることがアクティブ・ラーニングで重要なメタ認知を鍛える取り組みとして、それぞれポジティブな言及がなされました。次に、改善点として、学修成果の把握方法としてルーブリック表がほとんど利用されていないことや、AP事業の反転授業でログ（学習記録）を残せておらず、LMS（学習管理システム）などハード面での改善が求められること、サービス・ラーニングの導入が1%と極めて低いことなどが挙げられました。

その他の個別意見としては、以下のようなものがありました。学生の成長過程のデータ化（成長実感の定量化）とその活用、学生が学んだことを他の学生に教える学修方法（循環型学修法）の導入、様々な世代や文化的背景の社会人との交流（マルチエイジ、クロス

カルチャー）による社会教育、グループワークの進め成上のヒント（プレゼンテーションソフトウェアの書き出し機能を利用する、單元ごとに5～6分程度で編集する、など）、立正科目へのSDGs要素の組み入れ、建学の精神や教育目標との間にズレが生じないような形での立正科目の再構築、大講義室でのアクティブ・ラーニングにおけるブックエンドモデル（ある教育方法の間に別の教育方法を挟み込む）の検討、全教員を巻き込んだ形でのアクティブ・ラーニングへの能動的な雰囲気づくり、学修成果の観点からの全学・各学部の取り組みの言語化・対外的発信、等々がありました。

## 検証

今回の外部評価委員会を通してみた検証の結果、本学では、アクティブ・ラーニングに関して個々には優れた取り組みがあるものの、全学的にはもとより、各学部単位でも、それらが学位授与プログラム（学士課程教育プログラム）全体としての学修成果やアセスメントと結びついた組織的・戦略的取り組みにまでは至っていない状況を、確認することができました。これは一朝一夕に改善できることではありませんが、高等教育機関としての本学にとって基本的・本質的な課題として真摯に受け止め、改善に向けたプロセスを発動させなければなりません [全学、各学部]。

全学的・組織的に共有しかつ改善すべき個別の課題としては、ルーブリック（ないし学生カルテ）の活用を含めた学生の成長過程・実感のデータ化・活用方法の開発、LMSなどハード面の手当 [全学、地球環境科学部]、建学の精神や教育目標と結びついた立正科目の開発 [全学]、このこととも関連して、サービス・ラーニング科目の全学的導入 [全学、各学部（文学部社会科学および心理学部を除く）] が、特に挙げられます。

以上の検証結果については、内部質保証システムとして活用している「自己点検結果リスト（タスクリスト）」に掲載し、全学的・組織的に共有し、改善を図る所存です。

### 〈委員一覧〉

- ◎前田 早苗（千葉大学 国際教養学部 教授）
- 田中 岳（東京工業大学 教育革新センター 教授）
- 藤間 憲一（熊谷商工会議所 会頭）
- 樋口 元（京華女子中学・高等学校 教頭）
- 松尾 哲矢（立教大学 副総長 コミュニティ福祉学部 教授）
- 松下 和彦（株式会社船井総合研究所 上席コンサルタント）
- 守田 正夫（城南信用金庫 相談役）

※2018年8月現在  
※敬称略、氏名50音順、◎は委員長

## 仏教学部の取り組み 教員インタビュー

### 「学士課程教育の質保証へ向けて—初年次教育・導入教育から学士課程教育への展開—」

仏教学部仏教学科 手島 一真 教授  
仏教学部仏教学科 庄司 史生 講師

〈取材日時〉

平成30年12月12日（水）16:15～17:30

品川キャンパス第4会議室



仏教学科 手島一真先生(左) 庄司史生先生(右)

—本日はお忙しいところお時間をいただきましてありがとうございます。まず、仏教学部における初年次教育プログラムの特徴を教えてください

仏教学部では本年度より1年生を対象とした独自の教養的科目「教養基礎（日本語表現）」を開講しています。あらゆる学力・学業の基礎は日本語・国語であることから、まずはそこから力をつけてもらおうと考えています。必修科目ではありませんが、基礎能力の修得に向けて、履修を強く推奨しています。かねてから日本語表現の基礎的な能力の強化について問題意識がありました。これが脆弱になると、最終的に提出する卒業論文に影響が出てしまいますし、その過程である各学年の専門科目の知識修得や、定期試験での論述方法、さらには、授業内容の正確な受け止めの問題等にも繋がってしまいます。

また、それとは別に専門教育への導入科目として、以前から宗学科は「宗学基礎演習」、仏教学科は「仏教学基礎演習」を開講しています。この授業では、文献資料を読み解く力に加えて、漢文や古典文法で書かれている文章の意味を理解する力の養成を目的としています。本学部の専門教育においては漢訳仏典など漢文を読むための基礎的能力が求められますが、近年の入学生の中には高校で漢文を習ったことがないという学生もいることから、この授業を設定しています。また、仏教学は非常に裾野の広い学問ですが、これをテーマ型として全体を俯瞰できるよう組み立てています。こ

れに向け、毎回の課題として、次回の授業で扱うテーマについて現時点で知っている知識・イメージを記入してもらい、教員がそれを次の授業までにデータ化し、受講生全員で共有していく作業を行う等、学生が主体的に参加しやすい環境を作ることを意識しています。仏教学とは何か、どのような分野があるのか等、学問への誘いを兼ねつつ、1つのテーマでも様々な考え方があるということを理解してもらいます。

毎回の課題とは別に、意見や質問も自由に記入することができます。それらも共有し、継続していくことで「他の人の考えも分かった」「この分野に興味湧いてきた」というコメントが出てきており、この授業の成果を実感しています。

#### — 新入生オリエンテーションの内容をお聞かせください

2013年度の新入生オリエンテーションより「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」プログラムを導入しています。これは10人前後のグループが、光の全くない、視覚が役に立たない暗闇空間の中で学生相互のコミュニケーションをしてもらい、その能力や感性向上を目指したワークショップです。一般企業の研修でも取り入れられている手法であり、本学では学外施設を利用し、実施しています。綿密なスケジュール管理が必要となりますが、このプログラムを導入してから、それ以前に比べ入学スタート時点において学生の相互交流のハードルが低くなっており、大学生活への適応を図るうえで大きな手応えを感じています。

#### — 仏教学部では2017年度より

##### アセスメント・テストを導入しています

元々は仏教学科2年生向けの基礎演習における効果的なクラス分けを目的として、1年生終了時に測定を開始しました。その後、本学部における学びの基幹的能力と位置付けている文献読解力に関し、これを統一的に測定・把握するアセスメント・テストとして機能させる流れとなり、1年生入学時の学力把握、および1年生終了時における伸びしろの測定を目的として、今年度から年2回の実施となりました。カリキュラムとの連動等課題も多く、まだ試験的な部分もあり、今後試行錯誤を繰り返しながら、より良いシステムを構築していきたいと考えています。



## —全学共通初年次科目「学修の基礎」における 仏教学部の取組はいかがでしょうか

「学修の基礎Ⅰ」では、ダイアログ・イン・ザ・ダーク等の取り組みにおいて耕されたコミュニケーションの土壌や人間関係をさらに成長発展させつつ、全学教育の観点から本学の建学の精神や歴史を学んでもらいます。これらに加え、仏教学部では学外に出て宗教・歴史や文化財関連施設の見学も実施しています。展示内容や距離的な問題を考慮しているため実施時期は毎年異なりますが、博物館や美術館、古寺名刹等、様々な分野で実際の施設や実物を体験させ、触れることを主眼にしています。学生としては初めて見るものも多いと思いますが、実際に見たものを基にして、自分が関心を持ったものを忘れないうちに調べることによって、上辺の知識だけで終わらず、関心と知識がしっかりと結びついたものになります。延いては、専門分野での学びにも繋がっていくと考えています。



## —近年の学生の特徴や性格等、どのように感じていますか

入学時における学力という観点からみると、とくに英語力には幅があると聞いています。年度によって波もありますので、指導の際に留意しなければなりません。それとは別に「自分の意見を明快に述べられるか」という観点に着目しています。以前は恥ずかしがって発言出来ないという学生が多かったのですが、近年は少しずつ自分の考えが発言出来るようになってきました。一方で、発言の内容や基本的な話し方には課題が残ります。

基本的な日本語能力の強化には、「音読」が重要になると感じています。言い回しの基本に慣れ、実際に声に出すことで誤りにも気付くことが出来ます。専門分野段階での学びのハードルを下げるためにも、また、最終的な卒業論文を執筆するために必要な既存の研究成果・研究論文・研究書を読む能力を身に着けるためにも、初年次教育プログラムを通じて個々の学生にしっかりと研鑽を積んでもらいたいです。

## —学生に身に付けて欲しい力はありますか

基本的な読み・書きはもちろんのこと、何かを「自分で学ぼう」「自分から手を出そう」という「自ら踏み

出す力」を養成することが重要です。こちらから様々な話題を提供していく中で、他の学生の興味も共有しながら、自分が面白いと思うものを見つけてもらいたい。つまり、「良い学びをするための手段」をしっかりと提供し、本人が学びの対象に、自分からアクセスする気になってくれるように引き伸ばしたいと考えています。学生個々の基礎的学力に差異があることは注意点として意識しつつ、各学生の伸びしろを意識した授業を展開していきたいと思っています。

## —補習授業等、授業外での取り組みについては いかがでしょうか

仏教学部懇談室というものを開設しています。そこでは助教の先生や本学部のOB・OGの方々もチューターとして待機しています。卒論研究計画書など書類の受付も行っていますが、学生がちょっとしたことを相談したい時の窓口として機能しており、頻繁に出入りがあります。学生は勉学のことだけでなく、それぞれ様々な悩みを抱えています。いきなり応対が事務の人になると身構えてしまいますし、相談できる内容も限定されてしまうと思われれます。懇談室ではざっくばらんに学生の相談に対応しており、もちろん学修の内容であれば助教の先生がアドバイスをしてくれます。可能な限りきちんと対応して、学生それぞれが良い方向に向かうようにするところ、また学生全体の雰囲気がかかる場所として、懇談室はとても重要な存在です。



## —最後に、今後の方向性やビジョン等をお聞かせください

高校で受けていた授業から無理なく大学の学びに入れるような仕組みが重要であると考えています。これまでの初年次教育に関する個々の取り組みをより推進・発展させていくのと同時に、それらと連動したカリキュラムの全体構成を構築していきたいと思っています。

## —ありがとうございました

〈インタビュアー〉

学長室 総合経営企画課 相原百合絵 木戸朋克

# FD研修「著作権法改正が大学教育に与える影響」開催報告

日時：平成31年1月23日（水）

参加者：83名（教員58名、職員25名）

テーマ：著作権法改正が大学教育に与える影響

〈研修会プログラム〉

- 講演「著作権法改正が大学教育に与える影響」  
中村 壽宏 氏（神奈川大学法務研究科教授）
- 質疑応答

## 研修概要

平成31年1月の改正法施行により、大きな注目を集める「著作権法」について、基礎的な原理原則から教育現場における特例措置、そして今般の法改正が大学にとってどのような影響を及ぼすのか、研修講師の中村先生より、「よくある違反事例」を挙げながらパワフルに解説をいただきました。

第三者著作物の利用に際して、その自由利用が特例として認められる「授業の過程」の定義を再確認するとともに、この場合の「自由利用」に対する誤認や、普段教職員間で行われる何気ないやり取りの中での盲点が紹介され、その注意点や対応方法に、参加した教職員のなかには大きく頷く姿も見られました。

本学が取り組みを進めるICTを活用した反転授業等、教育の情報化への対応が急がれる中での法改正であり、技術の進歩により授業の多様化が進む教育現場において大きな変化となります。しかしながら、著作権者の利益を守るための補償金制度やライセンス制度など、新たな枠組みについても審議が続いており、大学経営に少なからず影響があることも解説いただきました。

タイムリーなテーマ設定もあいまって、多くの教職員が参加し、充実した研修となりました。



ご好評をいただいた上記研修が MediaDEPO で視聴できます！！（本学関係者のみ）

MediaDEPO > 教職員用フォルダ > FD研修 > 学内FD研修 > 2018年度



立正大学ポータルサイトからMediaDEPOへアクセスできます。MediaDEPOへはポータルサイトと同一のアカウントID、パスワードでログイン可能です。

Rissho University FD News Letter Vol.22

平成31年3月31日発行

編集発行：立正大学 学長室総合経営企画課

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL：03-3492-6872 FAX：03-5487-3340 URL：http://www.ris.ac.jp